

三行日記

神奈川県立麻生高等学校 三年

山崎 華子

僕は短い夢を見た
バナナボートにまたがって
海を滑って波になる

僕は短い本を読む
お城への道の途中では
少女がアケビを摘んでいた

僕は短い恋をした
便箋三枚分の手紙を渡して
バスに乗る人を見送った

僕は短いスカートは嫌いだ
危うく風にひらめくから
特に五月の初めごろ

僕は短く髪を切った
担当の美容師がへたくそで
寝起きの髪がまとまらない

僕は短い詩を書いた
あくび一つする間に読めそうな
さみしいヒツジの物語

綺麗な額縁はいらぬ

広島・広島学院高等学校 二年

和久井 航

綺麗な額縁は、いらぬ。

そのままの色を見たいから。

大勢の観客も、いらぬ。

誰かに見せたいわけじゃない。

豪華な絵の具も、高い筆も、必要ない。

欲しいのは、真っ白なキャンバス。

大きな大きな、ふたりのキャンバス。

まずは、あかいろ。

あなたが好きなきもちで、

全てを熱く、染めあげる。

次は、きみどり。

ふたりを、やさしい風が包むように。

そして、あおいろ。

膨らむ恋が、切ないほど愛おしいから。

いろんな色をませあわせ、

ふたりだけの色彩にして、

ふたりだけの大切なきもちを形にしよう。

まだ雪原のように白くて、

純粹にかがやくキャンバス。

ふたり重ねる未来はきつと。

名も無い景色を映すから。

ふたりの心を映すから。

大勢の観客はいらぬ。

ふたりの世界は、僕たちだけの

たからもの。

綺麗な額縁は、いらぬ。

ふたり重ねたいろどりが、

色褪せなければそれでいい。

ふたり描ける未来さえ、

あれば僕には何も、いらぬ。

優秀賞

お姉ちゃん

千葉県立安房高等学校 三年

加戸 海里

ある日突然、

私はお姉ちゃんになりました

2つ離れた弟が生まれました

お父さんもお母さんも弟を可愛がったから

私も弟を可愛がりました。

「お姉ちゃん」だからたくさんお世話をしました。

「お姉ちゃん」という言葉が

とてもかっこよく聞こえました。

小学生になって

たくさん弟とケンカしました。

「お姉ちゃんなのだから。」と

たくさん怒られました。

「お姉ちゃん」になりたいなんて

私は言っていないのに、と。

「お姉ちゃん」という言葉を

少し窮屈に思いました。

高校生になって

少し大人になった気分。

弟が頼ってくれるようになりました。

「お姉ちゃん」と呼んでほしくないけれど、

「お姉ちゃん」と呼んでほしいけれど、

いつかまで待つことにしました。

「お姉ちゃん」という言葉に

今は誇りをもっています。

言葉と共に歩く

大阪・大阪女学院高等学校 二年

杉村 明日香

曇り空の下

私は歩いてた

息苦しさと苛立ちを抱えながら

喉の奥に引つ掛かったまま取れない

言葉達と歩いてた

私は悲しかった

何も言えなかったことを

違う、そんなことではない

叫びたいのに叫べなかったあの子を

あの言葉達を

私はそれが悲しかった

誰に分かるだろうか

誰が悲しんでくれるだろうか

誰が、誰が、誰かに聞いてほしい

私の喉の奥から

私の心の奥から

生まれようとしていた言葉達を

雨がポツリ、と降ってきた

だけど言葉は泣かない

私も泣いた

だけど言葉は泣かない

言葉が泣かないのなら

私も、もう泣かない

そう言って涙を拭くと

言葉は黙って微笑んだ

佳作

掌の中のおばあちゃん

神奈川県立麻生高等学校 三年

根岸 祥平

僕の掌にはおばあちゃんがいる
本当のおばあちゃんではないけれど

本当のおばあちゃんは群馬県の高崎に生まれて
六十年間その町に住んでいた
たった一度だけ東京へ来たとき
僕は稲城市の小さい病院で生まれたばかり

初めて見る新宿はきつと外国のようだったに違いない
高崎駅から一人
鈍行に揺られながら何を思ったか
目もろくに開くこともできなかった僕は
ただおばあちゃんの掌に包まれながら
ちいさい手をグーパーグーパーしていたのだろう

掌のおばあちゃんは
僕が生まれたときからずっと居て
たったの一度も僕から離れたことはない

本当のおばあちゃんが僕から離れて行っても
掌のおばあちゃんは僕を励ます
悲しむことはないよ、ばあは掌にずっといるからねえと

でも僕がおばあちゃんのお骨を拾った時
泣かないと決めていたはずなのに
涙が止められなくて
掌のおばあちゃんが僕の涙をぬぐった

図書館の本

千葉県立安房高等学校 三年

杉田 汐里

私は本。いつも図書館の奥のほうの棚にいる。
そこには私の仲間がたくさんいる。
仲間はいつも近所の子どもの家に遊びに行く。
でも私は行ったことがない。

この図書館に来てから一度も外に出たことがない。
本当は私もみんなみたいに誰かの家に行きたい。
ずっとここにいるのはとても暇だ。
常にじっと待っているなんて嫌だ。
仲間は図書館に帰ってきたとき
「楽しかった」や

「外ってほんとすばらしい」
と言ってくる。私は本当はそんなの聞きたくない。
そして仲間たちは
「行ってくるね」と言ってまた出ていく。
私はそれを見送るだけ。
でもそんな時こんな声があった。

「私この本にする」
この子は私を手を持って図書館を出た。
これが外の世界。とっつてもうれしい。とっつても楽しい。

戻ってから仲間がたくさんお話した。
そしてまたいつもの日常に戻る。
図書館の棚でじっと待っている日々が。

時計と時間と

茨城県立水海道第一高等学校 二年

倉持 望

目覚まし時計を止めた。

「時間通りに起きられた。」

おかげで予定に間に合うよ。」

僕は時計に感謝する。

目覚まし時計を止めた。

「もっと寝ていたかったのに。」

僕は時計をにらんでつぶやいた。

僕は時計をセットする。

時計は僕のいうとおりに僕に時間を告げる。

あつというまに朝が来る。

僕の知らないうちに夜が明ける。

僕は時間が告げるとおり重たい瞼をあけた。

アラームを止めた。

「もう帰る時間か。危なかった。」

僕はアラームに感謝する。

アラームを止めた。

「うるさいなあ、もう帰る時間だ。」

もう少し遊びたかった、と

僕はアラームを苛立ちながら睨み付けた。

僕は時計をセットする。

時計は僕のいうとおりに僕に時間を告げる。

あつというまに夜は来る。

僕の気づかぬうちに日が落ちていく。

僕は時間が告げるとおり気持ちを押しさえた。

時間は僕を支配する。

僕は時計を支配する。

時間は僕をふりまわす。

僕は時計をふりまわす。

佳作

仲間色の虹

埼玉県立浦和第一女子高等学校 二年

滝澤 有咲

私の目の前には大きなキャンバスがある。

——自分の心をありのままに描きたい——

私の手は、しっかりと筆を握っている。

それなのに、自分のことが分からなくて、

不安で、自信がなくて、

私はただ筆を持ったまま、

何も描いていない。

自分の心と真剣に向き合ってみた。

自分の心にあるものは何か——。

大切な仲間が浮かんだ。

仲間への思いをありのままに描いた。

真っ白だったキャンバスに、

七色の虹が完成した。

何事にも一生懸命で、

限界を決めずに頑張るあなたは赤。

常に冷静で、

陰でしっかりと支えてくれるあなたは青。

元気いっぱい、明るくて、

やる気を引き起こす力のあるあなたは黄。

いつも気を配り、周りから

絶大な信頼を置かれているあなたは緑。

いつも笑顔で、穏やかで、

純粹さ溢れるあなたは桃色。

活発で、行動力も理解力もあり、

皆をまとめてくれるあなたは橙。

誰よりも大人で、責任感が強くて、

頼りになるあなたは紫。

——私の心にあるもの——

それは仲間であった。

私のキャンバスに描かれた

一生消えることのない仲間色の虹は

これから先も私を支えてくれるだろう。

入 選

鏡の中の私

千葉県立安房高等学校 三年

吉田 司

私の前であなたが笑えば私も一緒に笑いだし
私の前であなたが泣けばつられて私も涙を流す
一体何がうれしいのか何が悲しいのか
私はわからないし知ることもできないが
あなたが笑わなければ私は笑うことはできず
あなたが泣かなければ涙を流すことはできない
だから私はあなたと笑い共に涙を流す

あなたが休まず働くのなら私は休むことは許されず
一日中横になっていれば立ち上がることはできない
私も外へとび出して山や海を見たいけど
私はここから出ることはできない
だから今日も私はあなたと共に動くしかない

私の前に立っている今のあなたが私の姿
どんな髪型でもどんな服装でも
あなたがそこにいるから私はここに存在する
どんなに美しい身なりをしていても
あなたがそこにいなければ私はここに存在できない

私には喜びや悲しみといった感情はない
自分の好きな場所へ行く自由もない
あなたがいないければ私はここにいられない
そんな私の幸せはあなたが幸せでいること
だから私は今日もあなたの幸せを願っている

入 選

み ち

千葉県立安房高等学校 三年

神澤 みなみ

こんな田舎の幼稚園に
バスで毎日通ってた
がたがたと揺られながら

こんな田舎の小学校に
歩いて毎日通ってた
きやあきやあ騒ぎながら

こんな田舎の中学校に
自転車で毎日通ってた
シヤアシヤア鳴らしながら

こんな田舎の高校に
これまた自転車を通ってる
愛車はがたがた鳴っている

こんな田舎の片隅で
育って今日で十八年
来年からはこの足で
一人で踏ん張って生きていく

入選

うみ

千葉県立安房高等学校 三年

松井 佑奈

私はときどき海にもぐる
思考の海の底を目指して
お宝をつんだ船も竜宮城もないの
は知っていて
もぐっているのか沈んでいるのか
もわからずに
逃げるようにしてもぐるのだ

「自分は自分じゃないかも知れない」と
辞書を引きながら沈んでいく
優しい何かが引っぱりあげる縄を
たらずが
私自身がつかまらせてくれない
本能で水をかいて深く深くもぐる
のだ

どこまでいっても何もないから

偉人の本やら宇宙やらから
引っぱりだして言葉をつむぐ
自分以外全て敵だと言葉をつむぐ
が
その言葉が酸素になっているのだ

やがて私の器官はタコのように
黒いものを吐きだす
「他人」やら「世界」やら「宇宙」
やら
壮大なものの力を借りて
全てを否定して血眼で底を目指す
のだ

しかしまだまだつかないうちに
陸に必ずでてしまう
私の思考の浅さを嘆くひまもなく
とびきり甘えた泡をかかえて
あっさり陸にあがるのだ

妄想は現実には勝てるのか
私は底に一生つかないのか
皆が笑っている時に
私の海が開くのか

入選

生まれてから

千葉県立安房高等学校 三年

金木 実莉

自分の生まれた日のことを考える
当然覚えているわけはなくて
誰がどんな顔をして見守ってくれたか
細いお月様が空で笑みを浮かべる夜だったのか
お日様が街を眠りから覚ます頃だったのか
何もかもがうまくいかなかった時に考える

私の生まれた特別なようで、今と変わらない平凡な毎日が
何度も繰り返されて、いろんなことがある
親切にしたいこの気持ちを分かってもらえない時
雨雲のようにどんよりと、自分のしていることが
正しいのかさえ分からなくなった時
相手の思いを受けとる素直さを失った時
そんな自分に悔やんだり、落ち込んだりしながら
楽しいだけではない毎日を一步一步、歩んでいる

そんな何かに惑わされた時に考える。自分の生まれた日のことを
記憶の奥に眠るその日が、私に力を与えてくれる
笑顔に囲まれ、希望を託されながら生まれたに違いない
生まれた時に私を包んでくれたあの月が、今も変わらず
そこにあるように
生まれた時に優しく包んでくれた人も、今も変わらず
見守ってくれている。そう思うのだ
そして私は再び歩き出す

入 選

同 僚

毎日会って言葉を交わしていた
嫌でも必ず毎日言葉を交わしていた
それは別に苦ではなかった あの日から
むしろそれは習慣となり日常となった

私が折れそうになった時
その人は更に私を折ろうとした
それは別に非情なわけではない
むしろそれは私を支えてくれた

その人が困窮した時
私はその人から一歩引き下がった
それは別に見捨てたわけではない
むしろそれはその人を自由にした

喜びの表し方も怒りの鎮め方も違った
絶妙なバランスがそこにはあった
このバランスは誰にもわからない謎だ

そんな日常もこの夏に終わり
私の心には大きな空白が生まれた
その空白を今埋める必要はない
無理に埋める必要もない

信頼とはきつとそういうものなのだろう

千葉県立安房高等学校 三年

村松 駿

入 選

アンケート

わたしのゆめはケーキやさんです。
おいしいケーキをつくりたいです。
わたしのゆめは学こうの先生です。
学こうが大すきだからです。

わたしの夢はピアニストです。
たくさんの人を感動させたいです。

私の夢は、——あれ？
私の夢は、何だろう？

いつの間にか忘れていた
あの頃思い描いていたことを
目を輝かせて語った将来を
ああ、知らず知らずの内に
私は目を瞑ってしまっていたのだ

私は何になれるだろう
美容師、アイドル、警察官、学者
もしかしたら宇宙飛行士
そこに否定の言葉はいらない
大切なのは、走り続けること
前を向くこと

私は再び目を開けた
もう、ペンを持つ手に迷いはない

私の夢は

茨城県立水海道第一高等学校 二年

松本 彩

入 選

夏かしき

埼玉県立浦和第一女子高等学校 一年

田邊 萌瑛

今年もまた暑い季節がやってきた。どうして
こうも、昔を思い出してしまうのか。どうして
それは暑さのせいなのか。
それは、あの頃の記憶が愛おしいからなのか。

煩いセミの声。
一瞬にして咲いた空の華。
向日葵が真上から見下ろす。
全力で追いかける白球。
あの日自分は青春を駆け抜けた。

喉をつると滑る白糸。
レンズ越しに眺めた命の野原。
アサガオのつるが絡まる。
不意にやってきた夕立。
あの日自分は挫折を学んだ。

頭に痛みを走らせた氷菓。
踏みしめた砂が、海にさらわれる。
暗闇を騒がせた地元の祭り。
胸一杯に吸いこんだ故郷の香り。
あの日自分は人の愛を信じた。

今の自分は当時より色づいた。
あの頃は何かを見つけては、何かを失って
いる気がした。その代わり、日の長い季節は中
身がいっぱい詰まっていた。

サイダーを一口含む。ピリと泡が舌の上で小
踊りする。
体を大きくしていく入道雲を見つめて、今年
もこの季節はゆっくり過ぎる。

早々と過ぎ去ってしまった、私の青い春。
あの懐かしき夏、決して忘れぬ。

入 選

見上げる空に

茨城県立水海道第一高等学校 一年

名越 玲奈

私は手を伸ばす
あの空に向かって、高く
もつともっと高く
雲を払って、空を貫き
月と火星には触れても
本当の自分には、まだ届かない

私は土になる
何度蹴散らされても
色鮮やかな花たちと、しなやかな枝
どっしりとした太い幹さえも
力強く支えよう
どんどん育て、天まで届け

私は夢を見ている
目をあけたまま、「今」という夢を
そして置いて行かれないように
不安という大きな荷物を抱えたまま
みんなの背中を見つめながら
ただひたすら走ってる

この世界のスピードに
置いて行かれないように
たった一人の自分を
見失ってしまわないために

私は空を見上げる
届かないと知っていても
この手を伸ばしたくなるのは
きつとあの大きな白い雲を掴むた
めではない
私が望む、目には見えない何か
それを探したくて、私は今日も手
を伸ばす
無限に続く、あの空の向こうへ

入 選

君の手紙

千葉県立安房高等学校 三年

辰野 里穂

振り返ると真っ白な銀世界の中に
僕の足跡だけが点々と続く
今日は何を書こうかな

家の前に小さなポスト一つ
手紙が来るのを待っていると
手が錆びた鉄みたいに動かなくなるけど
バイクの音が聞こえると駆け出してしまっただ

僕の名前が書かれた手紙が来た日は
胸の奥がぼかぼかしてなんだか照れくさい
可愛らしい丸みを帯びた字が並ぶその手紙には
いつも小さな押し花が優しく香る
君を感じるこの時間が
どうしようもなく僕の鼓動を急かして
僕に幸せを運ぶのだ

嗚呼、雪解けの水が指先を朱に染める
庭の桜が目覚めたら一番に贈ろう
君が大好きな春の色を

入 選

白鷺

山口県立西京高等学校 二年

兵藤 薫

鷺よ
たった一羽で
小さな橋の欄干に立つ
足長の鷺よ
君のその足の長さでは
欄干の長さとは釣り合わない
不恰好にも見えてしまうその姿で
君は何を考える
その高さからでは
魚は漁れまい
筆で線を引いたようなその目は
何を映している

鷺よ
羽に光が反射して
一層目立つ
雪色の鷺よ
こんなにも蒸し暑いのに
涼しげな光を放っている
私は汗だくになって自転車を漕ぎ

君はちつとも動こうとしない
その高さからでは
下を見るのも怖からう
何かを睨むようなその視線は
何処へ向けている
そういえば君は
その山に団地がある
私は
今から学校へ向かおうとしている
君も私も
誰かと生きている
誰かと生きているのは
楽なことばかりではない
皆と一緒にいても
必ずしも孤独ではないとは言えない
背中の荷物と同じぐらいの重圧が
あるのは
君も同じなのだろうか